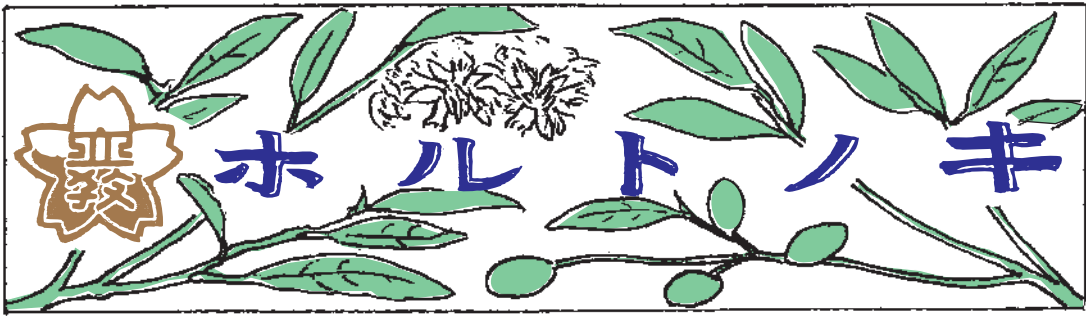




秋を探しに

キャンパスステイフンス

本年度は本校から中学二年生と三年生を合わせて生徒十二名の参加となりました。プログラムの大きな流れを記します。七月三十一日に羽田空港を出発し、約十時間のフライトを経てロサンゼルス空港に到着後、ドジャーススタジアムにてドジャース対レッドソックスの野球観戦をしました。ドジャースは試合には負けてしまいましたが、五回裏に大谷翔平選手のシーズン第二十四号の本塁打を見ることができました。八月一日にジュリアンという小さな町にあるキャンプ・ステイフンスに移動し、一週間キャンプ地にて過ごしました。例年のように、立教新座中学校三年生も共に参加しました。八月九日にキャンプ地を出発し、カルバーシティとハリウッドにてショッピングを満喫しました。八月十日にロサンゼルス空港を出発し、翌日の八月十一日に日本に無事帰国しました。

の人たちに自分という存在を受け入れてもらう経験をし、人の優しさや温かさに触れることは人生において極めて貴重です。なぜなら、次に自分が日本と外国の方と関わる時に同じように接しよう、あの時受け入れてもらえたように僕たちも受け入れようと寛容な姿勢が育まれる可能性が高いからです。生徒たちには自文化中心主義に陥ることなく、多様な文化間を行き来し、人と人をつなぐ存在になつてほしいと切に願っています。

さて、価値観に多大な影響を与えると言われるアメリカキャンプですが、今年度も参加者たちそれぞれが何らかの価値ある気づきを得たようでした。

次は参加者の振り返りです。この行事の全体像が掴める内容になっていきます。(引率 小林隆史)

アメリカキャンプについて 僕がキャンプに参加した理由は、最初は父にアメリカキャンプに行ってみないかといわれたからでした。立教池袋は英語の教育に力を入れている学校です。ですが、僕は英語の成績が低いといえるような成績ではないです。そんな時に海外や英語に興味を持ってほしいと思って教えてくれたそうです。そして、僕は、行って良かったと思います。

まず、このキャンプに行つて感じたのが海外と日本の違いが想像より大きい事でした。例えば挨拶では、自己紹介をした後に、"Nice to meet you." と言つて握手するのがアメリカキャンプでは普通でした。基本的に誰とでも明るく挨拶をすることができま



アメリカキャンプに参加して 僕は夏休みの間の十一日間アメリカキャンプに参加しました。参加したいと思った理由は、以前参加したことのある先輩にとっても楽しかった！こんな経験二度とできない、と教えてもらい興味があったのと、現地の人と交流しながらキャンプをしてみたいという気持ちがあったからです。キャンプステイフンスではキャンプ中に「英語」や「アメリカの遊び」などをアメリカの人たちに伝えるという一日があり、学校では昼休みに参加メンバーが集まって準備をする時間があり出発前から楽しみで

した。現地の人へ渡す土産を考えながら買うのも面白かったです。羽田空港を出発し、アメリカに到着してからすぐにドジャーススタジアムに行き、ドジャース対レッドソックスの試合を観戦しました。スタジアムはテレビで見ると迫力もありませんが、音も迫力もありました。夜ご飯はスタジアムで自分の好きなものを食べて、英語に触れる機会はずいぶんあり、ドキドキしながら無事にピザとポテトを注文することができました。今回はドジャース側で見ていて、試合は負けてしまいましたが、大谷選手のホームランを見ることができました。アメリカの気候は、日本に比べて乾



成績があまり良くない人やコミュニケーションが苦手な人が行つてもいい刺激を受けられると思います。もし、あまり興味がない人でも行つたら視野が大きく広がって価値観が変わると思います。大事なことは勇気を出して行動することと失敗してもめげないことです！(中三 福田隆多朗)

燥しており気温も少し低くて過ごしやすかったです。次の日、観光をしてからキャンプ場へ向かいました。最初に現地の人が集まってきたときは、緊張して目も合わせられない状況でしたが、そんな時に、僕たちのグループのスタッフの方たちが考えてくれたゲームなどを通して、同じグループになった子のこと

をよく知ること、知ってもらえることができ、親しく話せるようになりました。そこからは様々なアクティビティをグループごとに行いました。その中でも僕が一番印象に残ったのはアーチェリーでした。的はカードで、トランプや外国版のポケモンカードでした。アーチェリーは初めてでしたが、ちょうどカードの真ん中を射抜いた時の爽快感が今でも忘れられません。結果、なんと僕のグループの立教生は全員カードを取ることができました。他には、アスレチックやプールに入ったり、簡易的なウォータースライダーで滑ったり、ニワトリやヤギなどの飼育動物の餌やりなどいろいろなことを体験しました。アスレチックは高いところに上り、ワイヤーの上を歩いて渡るもので、高いところは苦手な、怖かったけれど現地の子や立教の友達が応援してくれて何とか渡りきることができ、一体感が生まれて友達の大切さを学ぶことができました。キャンプ場では野生のリスやウサギを見るこ



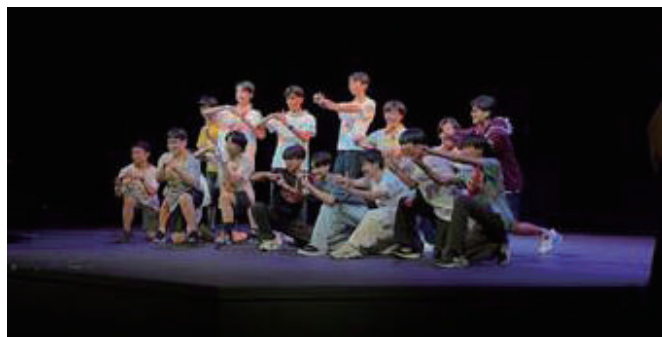
とができました。僕たちが寝ているキャンピンの壁に絵を描いたりもしました。グループに絵が上手な女の子がおり、グループ名のモチーフだったカニの絵を大きく描いてくれて、そのあとは周りの余白にみんなでの生き物の絵を描いていきました。僕はそこにタツノオトシゴを描きました。出来上がりを見てみると、みんな上手で素晴らしいものができたな、と実感しました。そして、ようやく迎えたJapan dayでは、当初とは担当が違うハンカチ落としを教えました。予想外の出来事で慌ててしまいましたが、友達のY君が上手に説明してくれていました。その間、僕は簡単な説明と集客に集中しました。無事にみんな楽しんでくれていたし、最後に来てくれたお客さんは、僕のグループの子で、ゲームで使ったハンカチをプレゼントしてあげたら喜んでくれたので達成感もよく感じることができました。お昼に先生方が作ってくれた焼きそばやカレーもおいしかったです。キャンプ最終日は、み

高の誕生日も経験できました。キャンプの最初は緊張していて、これがあと何日も続くのか、と不安に思ったりしていました。最後のほうにはもう終わってしまふのだな、と十一日間もあるのに日数が足りないと思えるほど楽しいキャンプになりました。このキャンプを通して英語で現地の人と交流する楽しさや、友達と協力することの大切さを学ぶことができました。最初是不安だったアメリカキャンプでしたが、勇気を出して交流してみたことで、たくさんの思い出を作ることができました。また機会があれば、今回出会った人たちに会いに行きたいです。日本にいるみんなに向けてお土産を買う時間もありました。リングが有名なジュリアンではりんごジャムと間違えてアップルキャンデルを買ってしまったが、家族はいい香りがすると喜んでくれました。ハリウッドでは友達用にキーホルダーなど、サンタモニカではアクセサリーなどを買って、トラ

ムにも乗りました。大きなハンバーガーやタコスなどの食べ物もおいしかったです。キャンプ外で一番印象に残ったのはアメリカのドリンクシステムで、自動販売機では水よりコーラのほうが安かったり、飲食店では日本の数倍はあつたような大きなコップが出てきておかわりは何回でも無料だったりしました。皆さんもぜひキャンプステイプンスに参加してみてください！
(中二 石井翔大)



**英国語学研修
(ハロウ校サマー・スクール)**
今夏も、七月二十九日から八月十二日まで、ロンドン近郊のハロウ校でのサマー・スクールに本校より十六名が参加しました(引率は英語科講師ロバートソン先生)。午前中にアクティビティや集大成としてのプレゼンテーションを含めた英語の授業を受け、午後にロンドン市内やオックスフォードなど英国の名所観光が組み込まれた濃厚な二週間です。参加生徒の感想をお楽しみください。
(担当 安原 章)



今回、英国語学研修でハロウ校に行ってきたイギリスでレンガ造りの建物が多くあつたことが印象に残りました。その中でも特に印象的だったところは写真の建物をとてもきれいな内装をしていました。また、プログラムの中でロンドンやウインザー城にも行きました。

今回の研修はどれだけ勇気を出したかが問われるものであつた。誰もが極東から来た学生に優しくしてくれました。毎日通った売店の店員も硬貨を使い切りたいという要望を叶えてくれた。街中で「？」な眼差しを受けたこともあつたが、多くの人は優しくあつた。イギリスに二週間滞在して一番に感じたのは世界の共通言語は優しさなのかもしれないという事である。

(高一 土屋敦裕)



寮では大阪から来ていた学校の人とずっと話していた。もちろん本来の目的は英語を学ぶというものが、正直英語は日本にいても学べる。その上でこのプログラムの学べるのは海外の空気感、イギリスの寮生活がどのようなものなのか、そして英語が完璧でな

くても伝えようと頑張ればなんとか伝わるという成功体験であると思う。四百年以上の歴史を誇る建物に囲まれた土地で過ごし、日本語が全く分からないスタッフへ何とか伝えようとしただけで貴重な体験になったと思う。

(高一 鈴木瑛仁)

オーストラリア

短期留学プログラム

昨年度から始まったオーストラリアプログラムには、中学二年生から高校二年生までの計十三名が参加しました。受け入れ先のオールセインツ校は、立教と同じ聖公会に属する学校で、共通点も多く、生徒たちは安心して暮らせる環境の中で、語学研修やアクティビティなど多彩な体験を重ねることができました。参加生徒の感想を以下に掲載していますので、ぜひご覧ください。
(担当 志水 元)

学び合いと温かい出会いに満ちたオーストラリアでの二週間

私は七月下旬から八月上旬の約二週間かけて行われたオーストラリアプログラ



います。

ムに参加しました。このプログラムでは、実際にオーストラリアへ行き、現地の学校での学習、またホストファミリーの家に泊めてもらい生活をするというものでした。プログラム参加のきっかけとして、海外で留学してみたいという自分の意思と、そろそろ留学行ってみたら？ という親の誘いの両方がありました。行く前は緊張というより、ワクワクの気持ちが大きかったです。

今回のプログラムを通して特に印象深かったこととして、現地生徒との交流があります。私達が今回行かせてもらったオールセンツという学校では、日本語とフランス語の授業があり、どちらかを選択してその言語を学習します。その中で日本語を学習している生徒と多く交流しました。私がわからない英語を、日本語を使って教えてもらいう。また反対に、日本語のわからない部分を、英語を使って私が教える。お互いにお互いの言語を学ぶ同士、お互いの言語を使ってお互いにこの交流はとってもいいなと感じました。お互いに、言語を学ぶモチベーションにもつながったと思

また、ホストファミリーとの生活も印象的でした。実はプログラム参加前、寮生活のプログラムか、ホストファミリーとのプログラムにするかすごく迷っていました。しかし、結果的にホストファミリーと生活をしてみても、こっちを選んでよかったと思います。ホストファミリーと生活することで、常に英語を使う環境になるからです。朝起きても英語、学校から帰ってきても、食事中も英語と

きても、食事中も英語とあった生活のほぼ全てが英語に変わります。英語を学ぶにはうってつけというわけです。現地で英語を学びたいという私にとっては、とてもいい環境でした。そのおかげで、リスニングや英語での会話スキルは上がりました。英語を学ぶという意味以外でも、ホストファミリーのおかげでたくさんさんの良い思い出が作れました。休日にはビーチやショッピングモールに行かしてもらい、夜ご飯ではラーメンや寿司を提供してくれました。本当に家族かのように振る舞ってくれたので、こちらも接してくれたように、優しく生活をするこ

とができました。

オーストラリアでは、異文化の違いに苦労することもありました。食事やスマホの使用制限、浴槽が無いことなど日本とは違うことを経験しました。しかし、これだけは言えることがあります。オーストラリア、またこのプログラムは英語を学ぶのにとても適しているという事です。上記のように現地生徒との交流で言語を教えあい、学ぶことができます。また、ホストファミリーと生活すること

で、常に英語を使う環境が作られていると思います。そして、何と言ってもオーストラリアの人は皆優しいです。多少英語が詰まっても笑顔で対応してくれたり、なんとか意図を汲み取ろうとしてくれたりしました。これは店員、先生、そしてホストファミリー全員そうでした。英語・海外に少しでも興味のある人はぜひオーストラリアプログラムに参加するべきだと思えます。英語が苦手でも学べる環境が整っています。また、英語を学ぶ、海外を知るという意味ではこれ以上ない経験ができると思います。

(高二 安田創矢)

UK-Japan Young Scientists Workshop

科学と交流の五日間

私は今回、初めてサイエンスワークショップに参加した。このワークショップを知ったとき、普段の学校生活ではできない科学の実験を体験できることに興味を持ち、参加することに決めた。しかし参加前は、イギリスの高校生と仲良くなれるのか、誰と同じグループになるのかという不安の方が大きかった。

このワークショップでは、日本とイギリスの高校生が一緒に大学で科学を学ぶ。私は「ラザフォード散乱実験」を選択し、イギリス人四人、日本人四人の八人のグループになった。初日は顔合わせの後、イギリスの生徒たちを東京観光に案内した。日本人同士ではすぐに話せたが、イギリスの生徒には何を話せばよいかわからず、最初は日本人同士、イギリス人同士で固まってしまっていた。

そんな中、東京スカイツリーでチケットの買い方を



説明することになり、簡単な英語を使って少し話すことができた。その後は、すみだ水族館や渋谷などを回った。体格の大きなイギリスの生徒が「ちいかわ」のグッズを楽しそうに買っていたことも印象に残っている。

二日目から四日目までは、大学の施設で実験を行った。私たちが行ったラザフォード散乱実験は、 α 粒子を薄い金箔に当て、通過した粒子がどの方向にどれくらい散乱するのかを検出器で調べる実験である。授業は基本的に英語で、内容も大学レベルだったため、最初はほとんど理解できなかった。しかし、先生方やグループのメンバーに教えてもらいながら、少しずつ理解できるようになった。

イギリスの生徒たちが物理の内容をよく理解していることにも驚いた。話を聞くと、イギリスでは十六歳頃から「GCE A Level (General Certificate of Education Advanced Level)」という課程で、自分の進路に合わせて学ぶ科目を絞り、より専門的に勉強していくそうだ。そのため、物理を選択している生徒たちは、同じ高校生でも私たちより専門的な内容をすでに学んでいた。分からないところがあると、図や身振り手振りで、簡単な英語を使って教えてくれる。一緒に実験を進めるうちに、三日目、四日目にはかなりの自然に話せるようになっていた。ホテルでも、日本人とイギリス人が一人ずつ

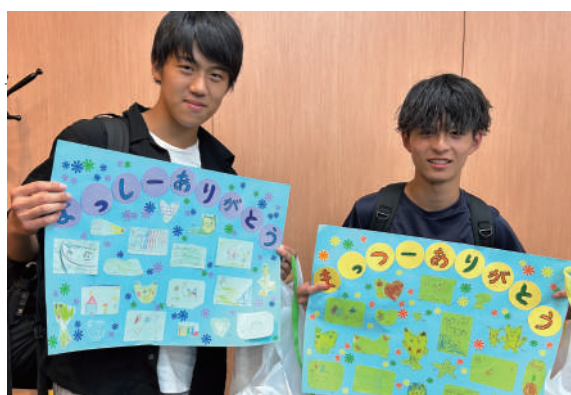
の二人部屋で生活した。授業以外の時間も一緒に過ごしたことで、イギリスの人たちの話し方やノリ、生活の仕方なども知ることができた。

最終日には、グループで実験についてのプレゼンを行った。私は、検出器から得られたデータを見やすい形に変換する部分を担当した。前日には一緒にスライドを作り、アドバイスをしながら何度もリハーサルを行った。本番は緊張したが、練習していたこともあり、落ち着いた発表することができた。

この五日間で学んだことは、物理や英語だけではなく、言葉や文化、学んできた環境が違っていても、一緒に何かに取り組むことで距離を縮められることを実際に経験できた。最初は不安でいっぱいだったが、最後には一緒に発表を完成させることができた。来年も機会があればぜひ参加したい。(高三 小森裕馬)

保育園ボランティア

夏休みを利用した豊島区内の保育園でのボランティア活動は、二〇〇七年に始まり、今年で二十年目を迎えました。今年には中学三年生から高校三年生まで、十六名の参加がありました。掲載した感想は、今年初めての参加にも関わらず、五日間フル参加した(ボランティア期間は二・五日で選択が可能、高校一年生の感想です。写真は、最終日に各保育園での活動後、学校



に集合し振り返りの会をした際の写真です。(担当 真崎昌子)

保育園ボランティアに参加して

今回、池袋第五保育園にて五日間のボランティア活動に参加させていただきました。子供達と直接触れ合い、また保育の現場を感じたいという思いから今回のボランティアに参加しようと思いました。最初は、子供と触れあう機会が減多になかったため、上手く接する事ができるか不安でした。しかし、子供達と触れ合うとともに少しずつ、その不安は解消されていきました。

活動中は、初日に五歳児、二日目に四歳児と、日替わりで異なる年齢のクラスに入り子供たちと触れ合いました。実際に子供達と接する中で特に印象的だったのは、子供たち一人一人の個性の豊かさです。最初にクラスに入った時に、人見知りをしてじっくりおもちゃで遊んでいる子や、「どこからきたの？」この



服のマークは何？」とたくさん質問をしてくる、好奇心旺盛な子もいます。そのため最初は、みんなとの距離感を掴むのが難しく戸惑うこともありましたが、何回も話しかけ、一緒に思い切り遊ぶことで、少しずつ笑顔で名前を呼んでくれるようになりました。

また先生方の子供達に対する関わり方には、さまざまな配慮が含まれているように感じ、とても勉強になりました。例えば、四人の子が喧嘩をした際に、一旦場を落ち着かせて、双方の意見をしっかりと聞く。また、その意見を全員に聞かせて、子供達が、自分達で解決に持っていくるように導く。そのように、単に世話を焼くだけでなく、子供達の自主性を育てるとともに、子供達に寄り添う形での関わり方の大切さを学びました。

今回のボランティア体験を通して、子供達との関わり方や現場での工夫など、多くの学びを得る事ができました。子供たちの笑顔や

素直な反応に触れることで、言葉以上に伝わるコミュニケーションの大切さを実感しました。また、一人ひとりの個性や自主性を尊重しながら優しく教える先生方の姿から、相手の立場に立ち、配慮を見せた接し方の重要性も学ぶことができました。

この五日間の経験は私にとって大きな財産となり、子供だけでなく、どんな人と接する時もこの経験を活かしていきます。温かく迎え入れてくださった園児のみんなと先生方、心から感謝したいです。
(高一 吉田柊真)

中高水泳部 夏の成果

▼ 中学水泳部

関東大会(山梨)
四〇〇m自由形 第二位
一五〇〇m自由形 第二位
高橋 真正(三年)

▼ 高校水泳部

インターハイ(滋賀)
一〇〇m背泳ぎ 出場
二〇〇m背泳ぎ 出場
阿部 煌生(二年)
五〇m自由形 出場
斉藤マイロ(三年)

四〇〇mメドレーリレー

阿部 煌生(二年)
菊谷 侑杜(二年)
小杉 慶人(三年)
斉藤マイロ(三年)

四〇〇mフリーリレー 出場

阿部 煌生(二年)
楠本 威早(二年)
小杉 慶人(三年)
斉藤マイロ(三年)
この夏、厳しい東京都予選会を突破し、中学は関東大会、高校はインターハイへの出場を果たした。以下は、出場した中学三年生、高校三年生の振り返りである。
(顧問 酒井一哉)

関東大会を終えて

今年の関東大会は去年とは違い、一人での参加でした。去年の関東大会が終わってから、七月の東京都予選会までは、全国大会だけを目標にして、苦しい練習にも耐えながら頑張ってきました。自信を持って臨んだ東京都予選会でしたが、気持ちが高回りすぎて思うように泳ぐことができませんでした。さらに、チームとして出場したりリレーでも、僕の力不足でフリーリレーとメドレーリレーの両方の切符を逃してしまいました。



た。僕は立教小学校から立教池袋中学校に入り、立教池袋水泳部の選手として大会で活躍できることを嬉しく思っています。そして、切磋琢磨する仲間、先生方、背中を押してくれる先輩方、コーチ、家族への感謝の気持ちを持って試合に臨んでいます。

スタート台に立つた一人ですが、そこまでの道のりは多くの人に支えられています。だからこそ、自分の不甲斐ないレースが悔しくて、初めて「水泳を離れたい」と思い泣きました。東京都予選会後は、二日間部屋から出ることができず、後悔が何度も押し寄せました。その間、もう一度、気持ちをを入れて厳しい練習に立ち向かえるのか」と自分自身に何度も問いかけました。できないのに頑張ったふりは考えられない。そう思いながら考え続け、最後に出した答えは、関東大会で優勝するため、もう一度スタートすることでした。立教池袋水泳部の代表として表彰台の一番上に立つ

ことだけを考え、後ろを振り向かず、前だけを見て練習しました。大会が近づくと、東京都予選会のレースが何度目も頭をよぎり、眠れない日もありました。そして迎えた関東大会。会場は山梨県甲府

市の酷暑の屋外長水路プールで、経験したことのない厳しい環境でした。多くの選手が体調を崩す中、酒井先生をはじめ、周りの方々に支えていただき、無事にスタート台までたどり着くことができました。初日の1500m自由形では、750mのターン後に一瞬視界が真っ暗になりました。体が鉛のように重くなりました。それでもみんなのことを思い出して自分を奮い立たせ、泳ぎ切りました。結果は二位。初めてレース後に酸欠で息が出来ない経験をしました。ベストタイムから大きく遅れ、悔しさが残りました。三日目の400m自由形は予選を一位で通過し、決勝ではベストタイムを出すことができませんでした。しかし、タッチの差で敗れ、結果は二位という去年の僕なら、二位という結果に満足していたと思います。でも、今の僕は満足していません。立教池袋を表彰台の一番上に上げることを目標に頑張りましたが、できませんでした。

この夏は、悔しくて苦しい夏でした。でも、先生方や仲間たちに支えてもらい、先輩方の背中を追いかけてながら、心も体も少し強くなることができたと思います。次に学校の名前を掲げて戦えるのはインターハイです。勉強にも水泳にも精進し、みんなと一緒に戦えるよう、これからも先輩方の背中を追いかけていきます。この夏の悔しさと経験を力に変えて、立教池袋の代表として、さらにもっと高い場所を目指します。
(中三 高橋真正)

六年間の最後の夏
50m自由形には、立て直

す時間がない。飛び込んだ瞬間から、後は全力で水を掻きだした。六年間かけて積み上げてきたものが一本のレースで答えを出され。今年の夏、私はその厳しさとそれだけでは終わらない何かを感じた。

インターハイ。高校三年間ずっとここを目指してきた大会だ。しかし、個人種目の結果は思うようなものにならなかった。「狙った試合ほど結果を出すのが難しい」。コーチや先輩たちが口にしてた言葉の意味を、自分の身体で理解した。準備はしてきたつもりだった。それでも大きな舞台はこれらの都合を聞いてくれない。

一番覚えてるのは、最終日の4×100mメドレーリレーだ。私にはレース前にメンバー全員と握手をするルーティーンがある。あの



日の握手は普段よりも明らかに強かった。言葉はほとんど交わさなかった。顔を上げると、これから最大の舞台に立つ人間の表情がそこにあった。背筋が伸び、まっすぐ前を見ていた。その瞬間、六年間一緒に泳いできた仲間と、いま全国の舞台に立っているのだという実感が込み上げてきた。その後のジュニアオリンピックでは、インターハイで崩れていたコンディションをかなり戻すことができた。タイムも自己ベストに近いところまできた。しかし、決勝には50秒届かなかった。まばたきよりも短い時間だ。悔しくないといえば嘘になる。それでも、あの結果を失敗と呼びたくない自分がいた。

思い返してみれば、六年間で一番きつかったのは高校一年の時だ。中学で関東大会を経験し、高校からはまだ夢の段階ではあったが、本格的に全国を目指し始めていた。練習はそれまでとは比べ物にならないほどきつくなった。それなのに試合では思うような結果がでない。自己ベストは少しずつ出ているが、全国を狙うには程遠い数字だった。努力がそのままだと返ってこない日々が続く、モチベーションは落ちていた。水泳を継続するかどうか正直に言えば

本気で迷った。
顧問の先生は、六年間ずっと同じことを言い続けていた。「水泳は個人競技ではなくチームスポーツだ」。レース中は誰も助けられない競技で、私はその言葉の意味を長い間、実は分かっていなかった。初めて分かったのがインターハイのリレーの時だ。関東大会でも、インターハイでも、ブルサイドから自分を応援してくれる仲間の姿が常にそこにあった。リレーはもちろん、個人種目を泳ぐときも、自分は自分だけの思いを背負っているのではなかった。あの握手の強さはそういうことだったのだろう。

0.03秒届かなかった。だが、私がこの部活で手に入れたものはタイムではない。すぐに結果が出なくても水を掻き続けられること、そして自分が一人で泳いでいるのではないと知ったこと。この二つはこの先どんな場所に行っても私を支えてくれるはずだ。
(高三 齊藤マイロ)

中学バスケットボール部 東京私立大会で第三位

日本のバスケットボールは、今とても熱い。八村塁選手、河村勇輝選手の活躍はもちろん、各年代でのバスケット熱も高まりを見せている。もちろん、中学バスケットボールもだ。東京都の私立中学校に通うプレイヤーが目玉のひとつに、大会が私立大会である。第四回を迎えた「東京私立中学校バスケットボール大会」が八月二〇日〜二四日にかけて行われた。予選リーグが三日間、そこを



(顧問 廣瀬・市橋)

のは、日頃から切磋琢磨して高めあった仲間の存在は、もちろんのこと、日々サポートしてくださる保護者の皆様、応援してくれた中学三年生や高校生に感謝しなければなら

催の「ジュニア農芸化学会」において、本校生物部の平田涼馬君が「カマキリの研究」について発表し、見事、銅賞を受賞しました。これまでも多くの先輩部員が同大会で発表を行ってきましたが、入賞を果たしたのは生物部として初の快挙です。

中高鉄道研究部
我々鉄道研究部は八月七日から九日にかけて開催された鉄道模型コンテストに今年も出場しました。今年も例年応募しているモジュール部門のほか、H0車両部門にも応募。モジュールは豊島区高戸橋付近、H0は東京都交通局7500形を制作しました。

決戦戦へ進出したのは、二〇一五年以来となります。
(顧問 對馬 剛)

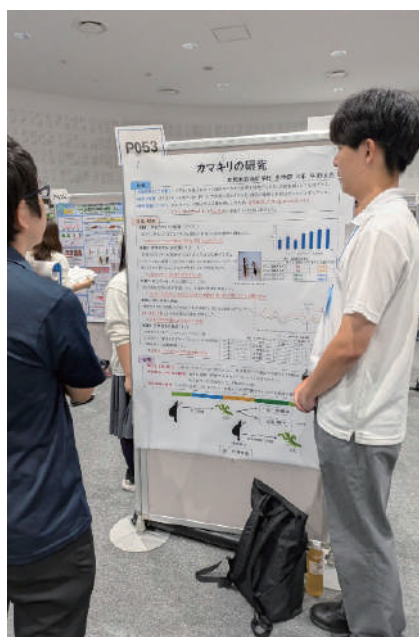
はなかったでしょう。皆さんありがとうございました。来年以降は時間配分に気を付け、今年以上のクオリティを目指していけたらと思います。
(高二 石井悠太)

高校生物部 カマキリの研究 ジュニア農芸化学会で 銅賞受賞・高校生バイ オサミット決勝進出

三月二十六日に同志社大学(京都府京都市)で開催された、日本農芸化学会主

今年にはモジュール部門が審査員特別賞、H0車両部門は最優秀賞を受賞することができました。制作に携わった十数人の部員、安原先生、OBの方々、そして道具を貸してくださった中仙道先生。誰か一人でも欠けていれば完成すること

今回のモチーフは、本校より歩いて行けるスポットをモチーフにしました。数回の現地踏査、都電の軌道のみならず周囲の集合住宅の配置・意匠などもつぶさに観察しました。また、東京メトロ副都心線のシールドトンネルは、なんと紙をレーザーカッターで切り出し、コンクリートセグメントの光沢を塗装でうまく表現すべく労を厭わずに取り組みました。六月のある土曜日、シールド断面をじっくり観察するため、葛西の地下鉄博物館に足を運び、



実寸大のトンネルの輪切り断面を目に焼きつけてきました。

また、石井君の説明のとおりに、今回は初の試みとしてH〇車輛制作にも挑戦しました。初出場ながら、東京都の情報開示サービスを利用し、車輛の主要諸元を手に入れ、緻密な作り込みを目指しました。結果、三〇団体中一位。まさに、ドイツの某自動車メーカーの「スローガン」、「Das Beste oder Nichts.」(「最善か無か」)です。賞は副産物、製作自体を愉しむことを第一に模型コン参加も回を重ねてきましたが、やはり取り組むからには上位入賞(自己推薦?)を狙いたくなるのが人情。どの参加校のチームも、夜な夜な(笑)ぎりぎりまで制作に取り組



んでいる話を会場で分かち合いました。顧問は、ただただCADとレーザープリンターを駆使した部員の作業を見守るのみですが、過去には機関車のチャラー(冷却ファン)を紙で制作、モーターを噛ませて作動させるまでの技術集団です。先のダイヤ改正で定期運用から引退した京阪電車2216編成の天井でねっとり回る名物、回転グリップを作ってもらいいたい、ひそかに期待しています。

(顧問 安原 章)

数理研究部報告 十三回目のIVRC

今年度のIVRCには中学生九名、高校生七名、合計十六名が参加した。二〇一四年度に初参加して以来、十三年連続で採択され、発表審査会において展示発表を行うことができた。今年の作品名は「投炭シミュレーター」である。蒸気機関車の機関士(運転士)と機関助手(石炭を入れる人)の二人三脚で行うVRコンテンツである。

機関助手を体験するVRコンテンツとして企画書を作成したが、審査結果に機関士やその他のゲーム性のあるギミックも検討した方がよいと講評されていたため、二次審査に向けて再構成し、機関士と機関助手の



二人で行うように企画を練り直した。その結果、二次審査を通過して、九月七日から八日に行われた日本バーチャルリアリティ学会(富山県立大学・富山県)において、決勝審査会が行われ、展示発表することになった。決勝審査会には数理研究部チーム以外は、すべて情報系、工学系、アートの大学や大学院の研究単位での参加である。二〇一八年以来、高校生チームは立教池袋中学校・高等学校数理研究部だけであった。

度で臨んだものの大学生・院生チームの壁は厚く、受賞することはなかったが、IVRCに協賛しているフランス大使館の方、特別審査員だった細田守映画監督、二〇一八年度に卒業したOBも体験していたことができた。この学会に参加している大学・企業を問わず、この分野を専門に研究する人や大学生から多くのフィードバックとアドバイスをたくさんいただくことができたのは、決勝審査会に参加できたからこそである。すでに来年度に向けて新チームが活動している

今年度のIVRCでは私は三回目の出場となった。数理研究部では、毎年夏休みにVRゲームの作品を完成させ、それを夏休み明けのIVRCで展示するのだが、今までの二回とは違うところがあった。

最後はキャプテンの言葉を紹介しておく。



IVRCの当日には表彰はなかったものの、様々な学びを得ることができた。特に印象的だったことは、他の大学の先生やゲーム会社の偉い人達にゲームを褒められた後、ゲームやソフトの開発をやめないでほしいと言われたことである。私としては、大学生になったらこのようなゲーム・アプリ等の開発はやめて、社会学や統計学を学ぼうと考えていたが、それらの学習に加えて、プログラミングを利用した開発を続けてみようと考えてみるきっかけになった。一つ印象的だったことは、細田守監督にゲームを体験していただいたことである。他の大学などの展示を含めて二十個以上ある展示の中から私たちの展示を選

それは、私が最高学年になって主體的にゲーム制作を進めていかなければならなかったところである。今までのIVRCでは、現在の大学一年生に当たる先輩たちが、プログラミングや3Dモデルの制作などの全てを仕切って、後輩たちと協力して制作を行っていたが、今年は私が今まで先輩が行っていたことをやらなければならなくなってしまうのである。加えて、去年のメンバーは九割が高校生で固められたチームだったが、今年のメンバーは半分以上が中学生で、年齢幅が広いゆえに統制が取れないこともあった。特に3Dモデル制作する班は、中学二年生が主体となっていて動いてもらい、大きな負担をかけてしまったと感じている。

それは、私が最高学年になって主體的にゲーム制作を進めていかなければならなかったところである。今までのIVRCでは、現在の大学一年生に当たる先輩たちが、プログラミングや3Dモデルの制作などの全てを仕切って、後輩たちと協力して制作を行っていたが、今年は私が今まで先輩が行っていたことをやらなければならなくなってしまうのである。加えて、去年のメンバーは九割が高校生で固められたチームだったが、今年のメンバーは半分以上が中学生で、年齢幅が広いゆえに統制が取れないこともあった。特に3Dモデル制作する班は、中学二年生が主体となっていて動いてもらい、大きな負担をかけてしまったと感じている。

十 今月の聖句

「見知らぬ友との同行」

「兄弟愛をいつも持っていないさい。旅人をもてなすことを忘れてはなりません。そうすることで、ある人たちは、気付かずに天使たちをもてなしました。」

——ヘブライ人への手紙13章1-2節

人間は、どのような理由であれ、自分が意図しているかどうかにかかわらず、互いに出会い、関わりながら生きていく存在です。私たちは、人との関係の中でしか生きることができず、生きる目的や意味もまた、共に見いだしていくことができるからです。

一方、このような人間関係の根本的な姿が最もよく現れるのは、自分にとって身近で親しい人ではなく、見知らぬ人との関係をつくっていくときです。人間は基本的に、見知らぬ人を疑い、遠ざけ、時には敵対しようとする傾向があります。だからこそ、そのような境界を越え、互いに共に生きていくためには、悩み、努力し、知恵を働かせ、献身することが必要です。その過程において、慣れ親しんだ関係の中では見えにくかった、人間関係の根本的な構造や性質が明らかになっていきます。

立教学院、立教池袋中学校・高等学校の教育目標の中には、真理を探究すること、そして共に生きることがあります。この「真理を探究し、共に生きる」ということを生きた経験として学ぶためには、見知らぬ人と新しい関係をつくり、友として共に歩むことが大切だと考えます。

学校の秋の文化祭や体育祭などの行事を通して、私たちはさまざまな人と出会い、共に準備をし、互いに引き合います。このような時間が、単に親しい人たちと一緒に過ごすための行事ではなく、互いに新しく出会い、友となるきっかけとなる時間になることを願っています。

(チャプレン 李 相寅)

んで体験してもらえたことは、一生の思い出になった。

最後に、今年はIVRCの富山での大会に進出したところまで止まってしまうが、来年以降には賞をとれるようなチームになっっているのではないかと考えている。後輩の様子を見ると、様々な個性や実力をもって

いる人たちがたくさんおり、特に中学二年生の成長はすさまじいと感じている。私は今年で卒業してしまうが、後輩たちには是非ともIVRCに挑戦し続けて、良い結果を残してほしい。

(高三 吉田大航)